

冒険探検粉塵記

改訂版

駄作者 文福洞先斗

2014年から2017年・・・まで続く

お断り、本改訂版は自然文化誌研究会会報『ナマステ』連載のエッセイに加筆修正するとともに、余話を追加しています。内容には事実と虚構が混ざっていますので、そのままを信じないようにご注意をお願いします。



文福洞のシンボル瀬戸物の狸

第1話 マリア様のもとで

連載を始めるに当たり、最初にお断りしておきます。この冒険探検粉塵記はうらない作家、文福洞先斗の私小説風、虚実綯交ぜになったフィクションです。いたって誠実な半生の面白悲しさの真実を綴ります。

おみゃーさん、知っとりゃーすか。ポンちゃんはかの有名なえびふりゃーの街、名古屋で育ったんだぎゃー。今では、名物はきしめん、味噌煮込みうどん、てんむす、ひつまぶしと発展しておりゃーすが、子どもの頃は何も知らずにこれらを食べたこともないがや。

ポンちゃんは老舗和菓子屋ぶんぶく洞の御曹司だったのです。小学校1年生のころに、祖父が他界するまで、ぶんぶく洞は上前津と覚王山日泰寺参道に2店ありました。織田信長が創設した甚目寺にも和菓子を納めていました。このため、戦後の貧しい時期にもかかわらず、甘いものには不自由しませんでした。しかも、近所の名門東海教会幼稚園に1年間行かせてもらいました。マリア様のもとで、就学前のひと年を過ごしたのです。ところが、ご近所には文化住宅（アパート）に住む、裕福なサラリーマン家庭が多く、こうした家の御子息は幼稚園に2年間も行くのです。1年しか行けないポンちゃんら自営業の貧民の子は、幼稚園で先に入っていた同級生ギャングに虐げられました。幼児のうちから、子ども集団の中で、差別や格差を刷り込まれたのです。この結果、直情的で、正義感が強いポンちゃんは反抗的なひねくれ者に育ってしまいました。しかし一方、マリア様のもとで、信仰への敬意はしっかりインプリントされていました。

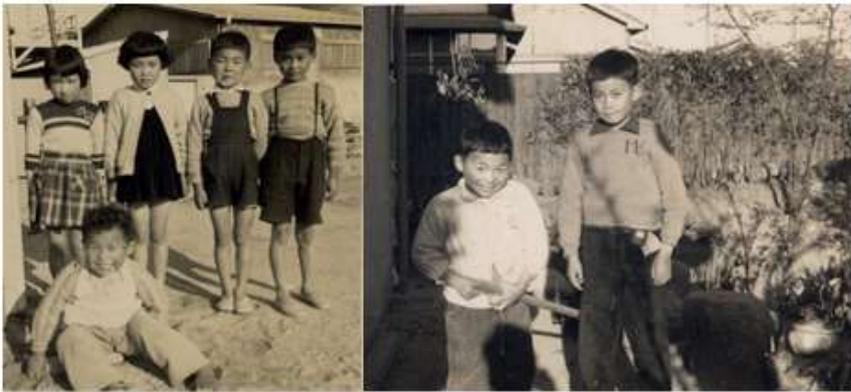
ポンちゃんは病弱で、鈍くさかったので、いつもお弁当をこぼしてしまいます。そこで、近所の女医さんは牛乳を与えることを勧め、幼稚園の先生はパンをもってくるように示唆したのです。おかげで、チョコパンばかり食べていたので、肌は健康な小麦色になりました。その後、運動は苦手でも下手の横好きで、いろいろやってみました。卓球、水泳、バスケット、……。野球はピッチャーでした。なぜ、エースかって、外野にすればすべてホームランにしてしまうから、打たせて取らせる作戦なのです。最も長続きしたのはラグビーでした。高校ではかの高名な瑞穂ラグビー場で試合しました。GFも見に来たので、お情けで後半出してもらい、張り切ったのですが、勝利の味は知りません。走るのが好きで、陸上リレーで1位になったこともあります。すべては同級生の頑張りの成果です。大学では航空自衛隊の大男たちとも試合しましたが、国立大学生なら頭で勝てと小ばかにされて負けてしまいました。

ポンちゃんは読書好きで、『冒険王』は愛読書、小学5年生の時には『少年サンデー』や『マガジン』が創刊されました。月光仮面や赤胴鈴之助、ゼロマンや鉄人28号は面白かったです。2枚の風呂敷を覆面とマントにし、自転車の車輪には段ボール紙を挟んで、爆音を響かせ、サタンの爪と戦いました。鶴舞公園の円墳で坂を転がると、めまいがします。これを真空切りと叫んでからしていました。確か、6年生の時には自分で新聞を発行し、アンモナイト大発見の記事を書いていました。探検家に憧れて、「海底2万哩」や「十五少年漂流記」は好きでしたが、長ずるに及んで次第にノンフィクション探検記に読書傾向が移っていきました。

できんぼで泣き虫でしたが、ポンちゃんは番長には従わず、だれの子分にもなりません。毎日、教室の机や椅子をひっくり返して、大喧嘩に明け暮れました。それでも理はこちらにあった

ので、意外に優等生がひそかに味方してくれていました。いじめに屈することはなかったのです。なぜなら、ジャイアンに喧嘩の仕方を習ったので、泣きながらも、番長にダメージを与えられるよう、元気になったからです。女の子にも目が大きいからという理由で、仲間外れにされ泣かされていました。ただ一度だけ、大いに泣かしてしまったことがあります。軟式テニスボールに穴をあけて、この中に小麦粉を詰めて、握りしめると、白煙が立ちます。つまり忍者の煙幕です。たまたま通りかかった運の悪い女の子にかかってしまい、頭が真っ白けになってしまいました。

6年生の時、親友のジャイアンが番長らに侮辱されたので、講堂で2対10の大乱闘をしました。さすがに勝ち目はなく、恐ろしい職員室に初めて訴えに行ったのです。ところが先に手を出したお前が悪いと一喝されました。これ以来、先公に強い不信を抱き、ひそかに反抗することになりました。また、中学生になって腕力が強くなってからは、だれもポンちゃんにちょっかいを出さなくなりました。大きくなってからの暴力は犯罪ですからね。喧嘩をしてはいけません。



写真（左）は東海幼稚園の同級生たち、写真（右）は小学校1年生（幼児は弟）

（ナマステ第117号掲載）

第2話 消えない罪と罰

御器所小学校では教室の床の隙間から、お小遣いや鉛筆などが落ちてしまうのです。このため木造校舎の縁の下に潜って、5円や10円玉を探索しました。5円あればコロケが1個買えるのです。10円あればお好み焼きが食べられるのです。もちろん先生にいい子ぶって届はしませんでした。でも、こんな僥倖は6年間に1回もあったかどうか。しかし、この罪はいまだに許されず、その後1円たりとも見つけたら、自分の財布に入れなくて、寄附箱に入れるようにしています。さらに、桜山中学校以降は、友人たちと花をバス停に活けるなど、ボランティア活動や途上国への寄附に、お小遣いや給料の一部を使い、ついには東京で家が建つほどの出費をすることになり、大変な罰を受けてしまいました。

2B弾で毛虫を虐殺し、かんしゃく玉地雷を石の下に置きました。セルロイド製下敷きを細かく切って、アルミ製キャップに詰めて、ロケットを作りました。釘ナイフは、今は無き市電に釘を轆いてもらい、コンクリートで研いで作りました。校舎は大方木造2階でしたが、6年生は戦後建築された鉄筋3階に入れたのです。水風船爆弾を3階から落とす奴らもいました。ポンちゃんは憶病でしたが、恥ずかしくて言えないいたずらも数多くしました。こうした楽しい悪さは秘密裏に行っていたのですが、即、告げ口する奴もいて、校長に朝礼で叱られて、なにもかも禁止されてしまいました。この罪も許されることなく、やはり大変な罪滅ぼしをしました。生物多様性保全や環境保全のために人生の時間を多く使うことになりました。

小学5年生の頃、学校花壇のチューリップ球根3個を勝手に拝領し、自分の花壇に植えました。親友の一人も共同正犯だったと思います。長ずるに及んで、帰省のたびに小学校の前を通ると、100倍にして返そうと思いましたが、いまだにできないでいます。なぜなら、友人のお父さんは多分、特別公務員であったし、ポンちゃんも公務員になってしまったので、この罪は隠さざるを得ないのです。その後、ポンちゃんは真に潔癖に、どの様な状況であれ、取ったりしないようにしました。しかし余談ですが、大学生の時は、知人がミカン畑でミカンを取って1っこ食べるとポンちゃんに放りました。不運なことに、畑には耕作者がいて、こっぴどく叱られました。「くれと言えややるものを、なぜ無断で取るのだ」と、自分では決してしないことですが、この場合共同従犯になってしまいました。

そうだ、余談ついでに、韓国に行って、夢中になって畑で雑草を調査していたら、頭上には柿の木があったのです。「桃李に冠を正さず」ですが、やはりとがめられ、同伴の韓国学生が柿を取ろうとしていたのではないと弁明したら、「わかった、柿をやろう」と笑顔で言われました。アザドカシミアルではうっかり夢中になって同じく草取りをしていたら、パキスタン軍に小銃でねらわれていました。

これらの罪業により、子どものため、学校のために、また、終生、小規模農家の一員としてたくさんボランティア活動をしました。自分でも耕作していましたが、勤め先では学生や近隣住民によって何度もせっかく丹精した植物・作物が盗難にあいました。最近では、山里の畑で、猿にトウモロコシとカボチャをすっかり取られてしまいました。悔しいですが、これも贖罪でしょうか。写真は猿に食べつくされたトウモロコシ、および電気柵で囲まれた畑です。ポンちゃんの畑にもやっとな簡易柵ができ、今冬の鹿の大麦食害は防げるとは思いますが、うっかり電源を切らなかったので、

自分がびりびり感電しました。



写真：左は猿に食べられたトウモロコシ、右は電気柵と雑穀畑。

(ナマステ第 118 号掲載)

第3話 色恋のことども

今やポンちゃんは売らない作家として無名になり始めた。先日、さる会合で自己紹介したら、ご婦人たちから、「うらないって大好き、是非占って下さい」と言われた。実は、小生はこっちの占いも好きだ。正月にはネット無料恋占いを必ず見ている。星座占いでは、蠍座は色恋にたけていると良い事としか書いてないので、年頭の励みになる。色恋こそは人生を彩り、操る重大事だ。最近、ついに『3年の星占い蠍座』という本まで買ってしまった。

さて、ポンちゃんは幻の老舗和菓子屋文福洞三代目の若旦那だったかもしれない。若旦那は放蕩息子と相場が決まっているので、ポンちゃんも子どものころは恋多き人生を送っていた。なにせ、生母は四姉妹だったので、生まれた時から女性に囲まれていたのである。幼稚園の頃は近所の秋ちゃんや夏ちゃんとままごと遊びをしていた。小学校の頃も、勉学に励むことは微塵もなく、繁ちゃんや大川君らとつるんで、石垣に囲まれた自宅の樹上に砦を造り、近所の男児たちとのけんかに明け暮れ、片手間に庭石の中の結晶発掘や花壇づくりに興じていた。いまだ放蕩息子としてはおくて、色恋にはあまり目覚めていなかったのだ。

ところが、初恋は中学校3年生の時に突然やってきた。パトラちゃんに巡り合ったのだ。恋は盲目だから、絶世の美女クレオパトラの再来かと想いを募らせたのである。本当はクレオパトラのような髪型であったので、パトラちゃんとも呼ばれていたのだ。彼女は活発でスポーツ好き、ポンちゃんは子どもの時から地味で、鈍くさいので、恋のライバルは親友の山崎君であった。彼はスポーツ万能で、クラス代表で水泳大会に出て、クラスの女子のあこがれの的になった。このため中学校での初恋は秘めたままにせざるをえなかった。しかし、山崎君は故あって、一年余り、名古屋に転校してきたが、卒業前、すぐに大阪に引っ越して行ってしまった。(注*名前などは仮のものです。)

ポンちゃんは高校に入ってラグビー部にはいったので、奥ゆかしくも、彼女の通う別の高校まで早朝トレーニングと称して走りに行っていた。ひそかな想いは募るばかりであったので、見るに見かねた親友の河田君が大いに気を利かせ、ポンちゃんのために、中学校の同窓会を明治村で開催してくれたのである。もちろん、パトラちゃんも参加していた。ボートにポンちゃんが一緒に乗って二人だけになり彼女に初恋を告白できるように取り計らってくれようとしたのである。ところが、河田君とカッパちゃんはしとやか美人の岩山さんこそが、ポンちゃんのお目当てと勘違いして、ボートを池に漕ぎださせたのであった。高1同士で、二人ボートに乗るなんて経験は初めてで、ドキドキしながら、無口のポンちゃんはほとんど会話をしなかったのだろう。優しくも勘の鋭い岩山さんには、心の中をどうも察知されてしまったようだ。

ついに、意を決して、恋文をしたためたが、もちろん返事はない。一方的な想いを諦めきれずに、大胆にも、彼女の家に行き、面会を求めた。すると、パトラちゃんの兄貴が出てきて、高校1年生のポンちゃんに言った。「東大に入らない奴は人生の落伍者だ。東大生になってから、出直してこい」。兄貴は、桜山中学の先輩で、かなり優等生であつたらしい。無粋なことに、恋路は邪魔されたのであり、初恋は陽の目すら見ないうちに、実に惨めな失恋に終わったのである。「豆腐の角で頭を打って…(穏当ではないので省略)」である。ポンちゃんはおバカだけれども、誇りは身の丈程度には高いので、恋路を邪魔した「東大」には決して入らないと、この時に受験教育と東大に対して終生の敵意を決意した。もちろん、信念を貫いて、実際にこの大学に入学しようと受験したことはない。

ただし、長ずるに及んで、何人も友人・知人がいたので、大学構内には頻繁に入ってしまったが、…。

初恋は稔らないと言われていたように、大失恋の顛末に至った。色恋が人生の重大事であることに目覚め、園芸部の先輩女子方に恋心を卑下するものではないと励まされた。もちろん、放蕩息子として色恋多き人生を送らねばならない運勢にあった。いくばくもしないうちに、ポンちゃんは新たな恋を得て、逞しく立ち直ったのである。まあ、「万事塞翁が馬」、人との出会いは行きがかりを大切に温めることかな。大失恋から学ばなければ、本当の恋愛が何か、考えもしなかった。人生で恋愛は美しい命だからね。

「命短し、恋せよ、乙女…（ Gondra の唄 ）」、「妻をめとらば才たけて、みめ美わしく情ある。友を選ばば書を読み、六分の狭気四分の熱…（ 人を恋うる歌 ）」などの歌の通りだ。若者だけでなく、人皆、美しい恋をせよ。明るく、純愛を育ててほしいね。ポンちゃんはどちらか言うと、私小説より白樺派が好きだからね。



写真：大学ラグビー部のコンパ集合写真、この頃は精悍だったポンちゃんは後列左にいる。

（ナマステ第 119 号掲載）

第4話 学大探検部を創る

ほんとの順番では、大学探検部を創りたくなかった前史を先に書きたいのだが、創立40周年記念の第35回環境学習セミナー案内に合わせるために、学大探検部の創立者の真情吐露を優先することにした。長嶋茂雄はかく語った、「巨人軍は永遠なり」。同じく、学大探検部伝説のコニちゃんも語った、「学大探検部は永遠だ」。しかし、最近では学大探検部栄光の歴史を知らず、歴史的経験から学ばない若者ばかりになってしまっていて、「永遠」が危うい。このことを憂えたポンちゃんは生前遺言を勝手に書いておく。人生は相応に歳を重ねてしまえば、あまりに短く、もう限りがあるので、「永遠」という想いには深い意味を感じてしまうのだ。

ポンちゃんは、1974年に学大に助手として就職した。学生結婚は認めないと義父に言われたので、博士課程進学はやめて就職し、同時に結婚した。しかし、指導教官たちからは坂道を上るための重荷を与えられていた。「日本の農業教育を再建せよ」とか「骨を埋めるつもりでやれ」とか、である。根が気弱なポンちゃんは、本気にして、真面目に人の倍以上働いたが、このことは別に明かすことにする。

ともかくにも、学生運動や公害反対活動に親しんでいたのも、学生側から教職員側に立場が変わることにはかなり緊張があった。しかし、この当時までには、悲しくも権力に負け、追い詰められたとはいえ、それでも許しがたい出来事が学生たちによってしてかされ、学生運動は信頼を失い、おおよそ潰え去っていた。学生は恐るるに足らず、まったく元気がなかった。だが、ポンちゃんは新たに大学探検部をつくるという希望を見だし、世界に飛び出す志に燃えていたから、しばらくして体験した性善説を揺るがしたほどの「いじめ」もたいがい平気でいられた。

阪本先生と穀菜食による長寿で有名な上野原町桐原に行き(1974年秋)、ここをフィールドと決めて野外調査の練習をせよと教唆された。そこで、「自然誌研究会」を創って、学生たちを募って調査するとお答えした。それなら、「自然文化誌研究会」とした方がよいと助言された。これが、東京学芸大学探検部の一源流になった(1975年春)。学内に募集のポスターを張り出し、現代表理事の中込メさんら、男性1名、女性3名、うち3名が理科学、1名が音楽科生であった。すぐに学生会員も増えて、上野原町から奥多摩町まで雑穀栽培を中心に、文化人類学的な調査の練習や登山の練習をした。

しかし、2年ほどすると、ポンちゃんは研究発表にあたって、実質のない共同研究(共著)を拒否したので、職場でいじめ(今でいう、忌まわしい用語パワハラ、アカハラ)に合い、助手ゆえに、「サークルの顧問はできない。学生と関わるな。」などと圧力をかけられた。ポンちゃんは、このいじめに屈して、自然文化誌研究会の顧問を、上司、原沢先生に依頼したのである。

その後、いじめに同情した教授たちが、いじめ上司がいない隙に、お情けで講師に昇進させてくれた。これによって、ポンちゃんは学生サークルの顧問になる資格ができ、改めて、自然文化誌研究会の顧問に復帰したのであった。この頃には、ポンちゃんは他大学の学術調査隊員としても、インド亜大陸などに出かけるようになった。一方で、国内では関東山地調査から、北海道の北方農耕文化調査に新天地を求めて行くことになった。写真1は、ポンちゃんの愛車スカイラインで北海道を3000kmは走った時の様子である。柴田さんや河口さんがいる。

この時期には、現副代表理事の中込メさんらが塚原さんらと冒険探検部(もう一つの源流)を創

っていた。同じ志の若者たちが集まろうと小林君や宮本君らが合同の話し合いを続けて、東京学芸大学自然文化誌研究会冒険探検部、略称学大探検部になった。こうして学大探検部は黄金時代を迎えたのである。創部 15 周年記念シンポジウム「風と人と」には、JT クロスカルチャー大賞による中央アジア学術調査の報告をするとともに、x x 大学から探検部の参加を得た。写真 2 は、北岳に山岳トレーニングに行った時の集合写真である。現副代表の中込ミさんや小川さん、初代事務局長の小川夫人（現、当時リーダー）も写っている。

学大探検部の卒業生の多くは、塚原さん、小西さんはじめ、海外で働いた人々が多い。ポンちゃんも密かに夢見ていた「海援隊」が学大探検部で実現したのかもしれない。



写真：上は北海道調査、下は北岳登山

(ナマステ第 121 号掲載)

第5話 人生を旅に過ごす

ポンちゃんは肌の感光性がよく、すぐにコンガリと日焼けするので、子どもの頃、クロンボと呼ばれていじめられました。クロンボというのは新大陸の黒人奴隷や暗黒大陸のアフリカの先住民を差別する表現です。まだ敗戦直後のことだったが、アフリカ系アメリカ人を差別することで、日本人であるポンちゃんを二重に差別したのです。もっとも、中学生になってちょっと学校の成績が良くなったら、酋長に昇格しました。だから、ポンちゃんは差別と偏見に敏感で、とても嫌いなのです。シュバイツアー博士のようにアフリカに行って、地域の人々とともにボランティアで働きたいと志を立てたのは、差別と偏見への強い反感であったのかもしれませんが。一方、長ずるに及んで、海外調査に出かけるようになると、小麦色の肌と容貌ゆえに、それぞれの国々の人々になじみ、ありがたいことに親しく付き合ってもらえて、調査はしやすく、また、観光地でも土産を買えとか強要されず、危険な目にも余り合わないで済みました。フィールド研究者としてはありがたい肌色の形質であったのです。

人生は良く旅に例えられます。偉大な宗教者も芸術家も、フィールド研究者も、旅を重ねて思想や作品を深め、高めていった人は少なからずいます。臆病なポンちゃんは晩生でもあり、子どもの頃は近場で遊んでいました。大学生の後半になってやっと、阪本寧男に弟子入りしてからは、国内外で雑穀調査に従事するようになりました。(本文中、尊敬する諸先輩に敬称を付けず、自分にちゃん付けをしてすみません)

さて、先日、第35回環境学習セミナー「学大探検部の40周年記念」でお話することで、ポンちゃんの冒険・探検とは何かを振り返って考えてみました。次表は冒険・探検の内容分類を示しています(『自然と文化』第5号、1985)。この表にはさらに「開発援助」と「教育・学習」を加えることにしたいと思います。

冒険探検の目的内容

冒険／探検は人生の道草 目的らしいものの分類

- ・ 経済 金儲けの種探し
- ・ 軍事 戦争の手伝い
- ・ 学術 調査、研究材料を探す
- ・ 宗教 布教、修行、経典を探す
- ・ スポーツ 心身の楽しみ
- ・ 観光 物見遊山
- ・ その他 なんとなく放浪



- ・ 開発援助 経済、軍事、宗教などほとんどを多角的に含む
- ・ 教育・学習 地理、歴史、自然など、環境学習 (写真：ナガ族のお姉さんとヒマラヤ)

厳密に言えば、冒険と探検とは主目的が異なりますが、本来、冒険・探検は個人の内発的意思で行われるのであって、外発的に権力者に強制されて行うことは好みに合いません。自らが苦勞して

こそ、達成した時に心身の充足があります。金儲けの経済、植民支配の軍事に関わる探検は外圧によること大で、宗教は内発的でもあるが、ある面では経済・軍事の手先にもなり得ます。なにせ、探検には旅費がかさみますので、どうしても有力者の支援を仰ぐことになり、癒着が起こります。他方で、学術やスポーツ、観光やなんとなくの目的意識は内発的な冒険・探検につながるのでしょうか。開発援助や教育・学習も、地域の人々や個人の内発性に対する支援、相互学習であってほしいのですが、外圧的な強要援助あるいは植民地経営につながる可能性もあります。

若いころの、ポンちゃんの冒険・探検の主目的は学術調査でユーラシア大陸を走り回りました。しかし、このところ自由な身の上になり、身の程をわきまえてヨーロッパの観光（物見遊山）に主目的が移りました。大聖堂、美術館、博物館、植物園、大学などを訪問して、本物の遺物や絵画などを見て、郷土料理や地酒を楽しんでいます。でも、昨今、世界が騒然としてきたので、観光旅行にさえも出にくくならないとよいがと、とても心配です。それでも若者たちは気を付けて冒険・探検の旅には出ましようよね。人生は旅の出会いによってさらに彩り豊かになります。

今、改めて『秘境ブータン』中尾佐助著を読み直しています。この中には、今西学派の面々が多く出てきます。今西錦司、桑原武夫、川喜田二郎、本田勝一（当時、学部生）らである。戦争前後のこの時代には、まだ地理的空白地帯、秘境があり、とてもわくわくするような探検旅行記です。本田勝一は日本での大学探検部の草創期の人なので、ジャーナリストとして膨大な著述がある中でも、ぜひ、『ニューギニア高地人』、『アラビア遊牧民』などは読んでいただきたいと思います。巻末の解説は中尾佐助と桑原武夫が書いており、冒険探検について意見を述べています。一度、15周年シンポジウムの際に、本田勝一に講演依頼したが、残念ながら諸般の事情で実現しませんでした。かれは、ポンちゃんの先生の先生である木原均を慕って大学を移籍したそうです。

第35回環境学習セミナーの発表を聞いて、学大自然文化誌研究会冒険探検部（学大探検部）は「すごい」活動実績を蓄積してきたと、ポンちゃんに関係当事者でなければ、自画自賛ではなく、本当に手放しで賛美したでしょう。特に日本とタイでの冒険学校の継続は素晴らしい経験の蓄積です。昨今、名利を求めて、猜疑保身を図り、口先ばかりの世間であって、ひたすら地道、寡黙に実行してきたから、地域住民・協力者の信頼を得てきたのだと思います。

ポンちゃんは直情的で、すぐに感情を顔に出すし、頑固一徹で直進する、すなわち、大学院生の頃は指導教官の花田毅一先生に無闇に突検するがむしやんな猪武者だと酷評され、環境教育学会を創った頃は谷口文章先生に猪突猛進の重戦車だ、と言われました。あるいはおっしゃる通りで、子どもっぽく突っ走って周囲の人たちをたくさん傷つけていたのかもしれない。しかし、ポンちゃん自身は人の意見をよく聞いた上で、判断と責任を自分で取ってきたのだと思っています。

ひるがえって、自然文化誌研究会 INCH の人々は名利を求めず、行為がゆっくりで、時として温厚さがもどかしくて仕方がないのです。でも、重戦車の猪突猛進の緩和・中和剤として、活動の結末のソフトランディングを助けてくださったのでしょうか。学大探検部40年を振り返ってみて、彼らと終生の友人として過ごせて、とても感謝しています。環境学習セミナーには30名ほど、翌日のINCH祭りライブにも30名ほどが参加したようです。旅をして、キャンプで同じ釜の飯を食べたメンバーに、久しぶりに会えてご同慶に堪えません。やっと印刷され、幻に終わらなかった『冒険と子どもたち』を一読して、本会がさらに冒険・探検活動を展開して、50周年を迎えられることが確信できました。

この2回は、ちょっと真面目な文体になりましたが、次からは元に戻します。2015-10-17
(ナマステ第122号掲載)

第6話 二言で世界を渡る法

冒険探検で世界各地あるいは日本各地を旅行して回るには、その土地、民族の言葉あるいは方言をできる限り覚えなくてはなりません。でも、ポンちゃんは言葉の習得が苦手で、まことに「困ったちゃん」です。人類学者たちは、調査地に住み込んで、住民の後を追いかけて、まず地方語を覚えます。植物学者は中尾佐助先生がおっしゃったように、観察、採集が主要な仕事ですから、あまり定住せずに、旅行して回りますので、言語習得はおぼつかなくても何とかします。でも住民の暮らし振りには深入りできませんので、住民も含めてそのフィールドを統合的に理解するには現地語の習得なしには、あまりにも不足です。なぜ、習得が苦手かと些末に及んで原因追及を試みしました。

1) 人見知りと無口

今から思い出せば、ポンちゃんは子どものころから人見知りが強く、恥ずかしがり、無口で、自らはほとんど話しませんでした。いつまでもいじけてはいけないう、無口を返上しようと思い、高校生の時には意を決して生徒会役員に立候補してみましたが、あっさりと落選しました。このままでは悔しいので、次の機会には敗者復活で懲りずにまた立候補しました。1600人ほどの生徒や先生の前で演説するのはとても緊張します。そこで、おそまつ君の漫画を演説原稿に張り付けて、緊張をほぐしました。「また性懲りもなく立候補した」などと言ったら今度は結構受けて、先輩女子高生から「かわいい」と大好評で、高得票で当選しました。

2) 耳の発達不足

子どもの頃、まともな音楽を聴く機会がなく、父が珍しくプレーヤーとレコードを買ってくれたので喜んだ束の間、「私のラヴァさん曾長の娘」なんていう曲が流れて、がっかりしました。中学生の時には、音楽のペーパーテストは満点でしたが、通信簿で5がついたのは1回しかありませんでした。悔しいというよりも、自分が上手に歌えないのはつまらないです。裕福なうちの同級生たちは、交響曲だの、ビートルズだの聞いていました。当時、流行っていたのは、中尾ミエの「可愛いベイビー」など……。子どものときから良い曲を聴いて、耳鳴らさないと、だめだったのですね。ジャイアンのように、ちゃんと歌っているつもりですが、どうも音程が不安定です。しかし、大人になってからも、自動車を運転しながら聞くのは、昼間は荒井由実、夜は中島みゆきとかの難しい歌で、車中で一緒に歌ってはみるのですが、自分で聞いていても、だいぶ外れています。

探検部員だったK君の結婚式に出て、酔ったうえで無理やり歌わされた際には、実に申し訳ないことをしました。ジャイアンのまねがあまりに上手だったので、学大の音楽科には生徒を入れない方が良くとまで褒められました。音楽科の諸先生方に申し訳なかったです。そういえば、高名な声楽の先生と懇親会の幹事をしたときは、体中が縮みあがりました。歌を歌わせられるのは、真っ平にご免だったので、落語を暗記して演じ、難を逃れました。

3) 興味に我を失い、集中しない

本当は言葉の習得が苦手という以上に、同じことを繰り返すことが嫌で、怠け者なんだと思います。ちなみに親友は毎日、NHK ラジオの英語プログラムを何はさておき聞いています。テキスト代は千円程度です。ところがポンちゃんは、英語は中学校から習い、仏語は大学教養部で成績「優」、独語はこの親友に通信教育で習って、博士論文の試験まで受けた。峨眉山調査計画のために中国語は

王先生から、中央アジア調査のためにロシア語はモスクワ大学に留学した東京外国語大学の院生から、ラジャバト・プラナコン大学大学院で集中講義するためにタイ語は留学生のAさんから、インド亜大陸の旅行記を書こうとヒンディー語も東京外国語大学の院生Kさんから習いました。ラジオもロシア語などは、初めのうちは少し聞きました。言葉は、毎日、反復練習をし、現地の人々との会話で実際に使用しないと、習得できません。しかし、お恥ずかしながら、習得に専念せず、興味を好きなことばかりにかまけて、言語習得に集中せずに、今さら、反省してもダメなのですが、何語をもものにしていないのです。それでも生きているうちに、サンスクリットをかじりたいと辞書は買いました。ちなみにラテン語はじめたくさんの辞書をもっています。辞書さえあれば、要約くらいは何とか読むようにします。

4) 日本人の舶来尊重

日本人が多数で、国際会議などをすると、「発音が悪い、綴りが違っている」など、事細かに批評されるのです。日本人に小うるさく言われるのが嫌で、口をつぐんでしまいました。実際には、ちょっとくらい違っていても、黙っていてまったく意思疎通できないより、ジャングリッシュでちっとも構わないと思いますので、口を開けることです。例えば、オーストラリア人だって、todayを“ツダイ”というので、どうして「死」ななければいけないのかとびっくりしました。ウズベク人はgirlを“ギョル”というので、どうして「魚」なのか、これまたびっくりしました。中学の英語の教科書“Jack & Betty”ではcanは“カン”と聞こえていたのに、教科書がすぐ変わって“キャン”と聞こえ、しばらく切り替え困難でした。

さて、いくつも言い訳を並べましたが、ポンちゃんはとても恥ずかしながら、つたない英語で世の中をやり過ごしました。長らくインドにいたのですが、多言語のこの地域では、ヒンディー語、ウルドゥー語、ネパール語、シェルパ語、カンナダ語など、…何もかも片言だけで、結局はずぼらして、インド人同士でも共通に通じる英語だけで済ませてしまいました。インド亜大陸を旅行していたら、ヒングリッシュの早口で語尾の“r”が強調されるので、聞き取りにくかったのですが、慣れればお互いにおおよその意思は通じます。

しかし、読者の皆様は大人になってから、どうかまじめに多言語の習得に努めてください。子どものときは、まず日本語をよく覚え、日本語で考えることができるようにしてから、外国語を学んだほうが良いかと思えます。幼児から英語を学ぶのには疑問があります。私たちは日本人ですから、母語を大事にしたいです。ポンちゃんの見解では説得力が弱いでしょうが、多言語を操るかの親友も同意見です。いくら英語が上手にできても、総理大臣には国連では日本語で演説していただきたいです。

さて、本題は最後になりましたが、二言で世界を渡る法を述べます。それは、「こんにちは」と「ありがとう」です。どの民族言語においても、お付き合いはこの2語で終始します。この二言を言って、ちょっとニコリとすれば、初対面でも緊張が解けます。ずぼらなポンちゃんは、たくさんの言語でこの二言だけは言えます。これで、ちょっと大変だったけれども、何とか楽しく人生を渡って来たんです。本誌『ナマステ』はインドやネパールで大方通じる「こんにちは」という最初の挨拶です。暖かくなったら、また旅に出かけましょう。



写真：左はトットネスの Dr.バイク、右はエデン・プロジェクト

(ナマステ第 123 号掲載)

第7話 キビに魅かれて文明の十字路へ

キビの栽培化起源の地は中央アジアからインド亜大陸北西部であるとの仮説を、阪本老師が唱えたがために、ポンちゃんは中央アジア内奥に行くことを願望し始めた。いいよな～、莫高窟の敦煌や流砂に埋もれた楼蘭、ウルムチやトルファンのもっと更に先、ウイグルなど遊牧民族の草原と砂漠の世界、太陽の国ホラズム…。探検への憧れ、血が熱くなってくるよね。

今から20余年前（1993）、憧憬が現実となった最高の探検旅行の日々での、多くのシーンを鮮やかに思い起こすと、自賛で手放しについ顔がほころんでしまう。砂漠の熱さに生きる実感があった。ガンガの蒸し暑さとは違う、むしろ心地よい、乾いた熱さだった。詳細な事実の旅行記は改めて書くことにし、ハイライトのみを脚色して、夢の日々の想い出を語りたい。

サマルカンドのバザールでは、シャシリクの焼ける匂い、ハミウリの甘ったるさ、ラグマンの油の味、プロブの丸ごとニンニク、ジャガイモとよく合うディルが好きになった。今ではキュー植物園で購入したディルを毎年育てている。

中央アジアハイウエーの路側、ポプラ並木の下で飲んだ温いピーバ。トレーラーがドラム缶を大きくしたようなピーバのタンクを運び、路側に置いていく。ジョッキはコンポートの大きな空瓶だ。熱い路上で温いピーバを飲んでもうまくはなかったが、ほろ酔い心地はとてもよい。反対に、歓迎会でのウオッカの一气飲みには耐えられなかった。調査旅行でありながら正体を失うほどに酔いつぶされ、トイレで寝る羽目になった。そこで飲酒は当番制にした。ソ連崩壊後で、配給票がなければ庶民はウオッカなど買えないので、日本から偉い植物学者が来たという名目で、現地ウズベクの隊員は市長からガソリンとウオッカの配給を受けた。一人一人が挨拶をしては一气飲み、10人いれば、10杯である。

キルギス大学の薬草園で野宿した時は、その香りで心身が洗われるようだった。しかし、空港免税店で買っておいたシーバスも一气飲みで2本がすぐになくなってしまった。ロシア語、ウズベク語、キルギス語、日本語で、インターナショナルを合唱した。ソ連は崩壊して、レーニン像も引き倒され、砂漠の民は коммуニストからイスラム教徒に戻ったのだが、これだけが皆の知っている世界共通の歌だった。

ウルゲンチに行き、ヒヴァ城に泊まった。この頃は、まだ自由旅行は一般に認められておらず、インツーリストのホテル以外では宿泊できないはずだった。したがって、外国人が泊まるのは75年来無かったことで、朝帰りなど、ちょっと粋だったのかもしれない。ブハラのミナレット（尖塔）にも登った。きつく狭いらせん階段を大股で回転しながら登るので、本当に目が回った。

ビシケクの大らかな街並み、スズカケノキ並木、乾いた空気、中央アジアにきてうれしかった。各地のバザールで、地元の産物食べ物を見て歩くことは、とても楽しい調査の始まりだ。多様な民族の人々が店を出し、また買い物に来ている。バザールの匂い、色彩、雑踏の音、生き生きとした人々、…五感が目覚めて、輝くね。バザールでは、ノンを展ばすローリング・ピン、取り出しようの厚手の手袋、ナイフなどを民具として買った。コーカンドのバザールでは、ハッとするような美少女と目が合った。彼女は小柄で、金色の装飾を施した帽子を着けていた。左右の店を物色しながらぶらついていたら、仕立屋の店先から、かの美少女が手招きしている。男心を見透かされたのかと狼狽したが、招かれるままに店に入って、店員の女性たちと一緒に写真を撮った。写真を送る約

束をして、住所・氏名を書いてもらったので、日本から送った。今となってはウズベク語かロシア語かの区別もできず、彼女の名前も解らない。ペルシャ系の織姫なのだろうか、彼女は美しかった。

たった2か月ほどの調査旅行であったが、お金にはほとんど苦労した。まず、成田空港でエクセスを支払うように言われた。ソ連崩壊後で、食糧難なので、配給票がなければ食糧は買えないので、日本から食糧を持参せよとのこと、荷物が多すぎたのである。宅配便で送り返すということで、分散して隊員の機内持ち込みにし、難を逃れた。トラベラーズ・チェックで調査費をもっていったが、モスクワに着いたらTCは換金できないと言われ、それでは現金なしと同様だ。困り果てて、後続メンバーには現金を持参するように言った。しかし、北京ホテルだけはとても悪い率で換金できることのであった。タジキスタンに行くと、新しい貨幣ソンが発行され、ロシア・ルーブルは使えないという。また、納得できない率で換金しなければならなかった。後に聞いた話だが、某国大使はブラック市場で換金して利ザヤを稼いだという。酒を飲みながら、大使の元調理人が言っていた。このルーブルも、1990年以前の札は使えないなどと突然決められ、持っていたいくらかの札は紙ごみになった。研究所の所長は種子の持ち出しに関して多大な支払いを要求した。彼のアメリカ旅行の資金が欲しかったからである。私は、そんなに支払ったら日本に帰れないと名演技で金額を値切ったので、親しくなった研究員から喝采された。些末だが、通行税だとかお土産の関税だとか、あちこちで、公務員らから明らかな袖の下を要求された。また、抗生物質など医薬品の持ち合わせを渡すようにも要求された。ソ連が崩壊して、中央アジア諸国が独立するこの時期は、思想的価値観が崩れ落ちて、大変な動乱期であったのだろう。あくまでコミュニストという人もいれば、イスラムに戻る人もいる。中央アジアの民族史は実にダイナミックだ。

私たちはロシアのビザしかなかったが、国の転換期の空白期間に自由旅行ができた。独立したてで、ビザすら発給する体制が出来ていなかったということだ。その後、1996年に、再度、インド経由でウズベキスタンに行った。日本でビザを取っていなかったのも、ビザを得るのはとても大変であった。日本から出たころには東京にウズベク大使館はなかったので、ビザは当然取得できなかった。インドに1年ほどいるうちに、東京に大使館が出来たので、日本人は東京でビザを得るべきだという論であったようだ。ニューデリーのウズベク大使館に何度も通い、無為に大気汚染のひどいニューデリーに1週間余計に滞在した。本国に聞いているというだけで、窓口で門前払いであった。やむを得ず、日本大使館ルートで取り計らってもらい、タシケントでビザを取得した。

農民の皆様、バザールの人々、日本語学科の学生の皆さんはじめ、多くの人々に親切にしてください、無事調査旅行をすることができた。天山山脈の周辺を巡った旅行は後の研究に有益であった。キビの起源地、祖先植物をおおよそ確定できたからである。ウズベキスタンには多くの民族を出自とする人々がいる。ドイツ、朝鮮、トルコ、イラン、…。民族文化の多様性はハミウリの生物多様性以上で、まさに文明の十字路である。ウオッカ、ウイスキー、クワス、ピーバなど、酒もいろいろ飲んだ。カザフの馬乳酒は満天の星の下で野宿して遊牧民と飲んだ。ポンちゃんの楽しい人生的一幕であった。



写真：タシケント東洋大学日本語学科生とチャイハナにて（上左）、多様に富むハミウリ（上右）、ミナレット（下左）、スタイリストと調査隊員たち（下右）。

（ナマステ第 124 号掲載）

第8話 環境教育学の創業のころ

時代をワープして1974年に戻り、30年ほどを未来（近現在）に向かって辿ってみたい。環境教育学を創生するために大変お世話になり、最も尊敬する阿部猛学長（当時）がご逝去（2016年5月26日）されたと、ご令嬢からお葉書がくしくも昨日届いた（8月）。阿部学長は助手からすれば雲上人で、めったにお会いできる方ではなく、恐る恐るお手紙を差し上げ、環境教育学の確立のために下に記すような行動をとることに寛大なご許可をいただけるようお願いした。好きにして良いとのお返信をいただき、これで小雑魚は水を得たのである。

また本日、滋賀大学のA教授から『日本環境教育小史』をご恵贈いただいた（なお、本文中の登場人物で自然文化誌研究会にゆかりを結ぶことのなかった方々は仮名とする）。当時、「反社会的」と煙たがられていた環境教育も、今日では「ESD」や「ECO」となって権威づけられ、あまりにも人口に膾炙した。たくさんの関連書が出て、まことにご同慶に堪えないが、一つだけ「痴愚」（ちぐは愚痴ではない）を言っておきたい。

日本における環境教育の創業には、ポンちゃんと自然文化誌研究会の面々が事務局として重要な下働きをしたのだが、公的な文書や書籍には事実として記述されてはいない。私たちは有名有利やメディアを避けて、地道な現場実践と自律した理論構築の作業を続けているのだが、このくには、名利を声高に言わなければ、無名非利の任意な市民活動や調査研究の成果は世間に知られず、黙殺され、無かったことになる。たとえ一時有名になっても、学問・思想すら商品とされて、情けないことに消費され、売れ残って賞味期限が過ぎればゴミ箱に捨てられる。

私たち自然文化誌研究会の目的である冒険・探検の志は金銭で売り買いできる商品ではない。このくには子どもたちや農山村「辺境」（実は源流）の人々に役立ちたいと自費で自律ボランティアに、自由気ままに楽しく継続してきたので、もとより有名有利を求めてはいないから、世間に知られずとも好い。ただ、「痴愚」というのは、こうした無名非利の市民意識をこのくにはの人々の2割くらいが選択共有しないと、このくにはの衰退は免れないということだ。血の気が多く、悟りきれないポンちゃんとしては、ここが正直に悔しい。だから、せめてのあがきとして、非公式な事実を冒険探検粉塵記に記録しておきたい。しょせん粉塵の中に生息する一寸の虫にすぎないのだが、五分の魂はあるのだ。

さて、1974年4月から東京学芸大学職業科農学教室の助手になって、ポンちゃんの冒険と挑戦の第二の人生が始まった。「職業科」という教科は、他教育学部では中学校技術科（工業）に大方編成されたにもかかわらず、学大は規模が大きかったので残存して、農学教室は主に農業高校教員、商学教室は商業高校教員の養成をしていた。教員免許「職業科」は残存していたが、すでに中学校ではこの教科はなくなり、養護学校（現在の特別支援学校）にのみ、有効であった。いわゆる特殊教育・障害児教育には、農耕・園芸作業が機能改善に有効であるとするモンテソーリ・メソッドの影響が強かったからであろう。

文部省教育大学室長からは「職業科を廃止せよ」とのお達し行政指導が強くあると聞き、就職したとたんに「農業教育」は不要だと冷水をかけられた。もちろん、こういう偉いお役人には学長でないと直接面会はできない。年齢も大して違わない学生たちも、役立たない職業科教員免許とこの理不尽に不満を抱いていたので、何とかしようと考え出したのが、農業を基盤とした「環境教育」

であった。教授たちは不賛成、助教授たちは何とか賛成してくださったので、環境教育研究会を創ることになった。事務担当として文書の草案はポンちゃん助手がほとんど作成していた。環境教育研究会は3人のB・C・D助教授が唱道して創立したと当時の教育新聞に載った。研究会の事務作業はポンちゃんの仕事であり、研究会の準備、雑誌の編集、経理など、ほとんどの裏方を喜んでしていた。

しかし、B助教授から共同研究ではないのに雑草の論文を共著にするように言われて、それは科学的態度ではないので共著を固辞したところ、「助手は奴隷なので、自分の言うことを聞いてればよい。君を絶対万年助手にする」と言われた。性善説のポンちゃんが人生で初めて私的怒りを抱いたことを心に認めた。学園闘争を経て、大学には学問の自由、自治があると思いたかったので、この発言は気に入らず、大いに反発した。国連大学の学長になるとまで言っていた自信家のB先輩との蜜月、信頼関係は2年で壊れた。それでも、環境教育についてセンスがないとはいえ、B氏の努力がなければ環境教育研究会はできなかったので、世間は公正に彼を評価すべきだろう。その後10年ほど、環境教育研究会の事務方は続けたが、残念ながら先細りになった。B氏の功名心の強さが人々の集まりを阻害したのだから、ポンちゃんは以後心して、私利私欲と有名有利を一層戒め、裏方に徹した。志を達成するには多くの人々の助力が必要で、ほんとうに無欲でなければ、誰も援助はしてくれないことを、大学就職2年目で心にしみて学んだのである。

低迷した環境教育研究会を離れて、日本環境教育学会準備会を始めることにした。前轍を踏まないように、3年間かけて、周到に呼びかけ人を500名ほどに増やしたところで、日本環境教育学会を創立する戦略をとった。自然文化誌研究会は着実な地ならしをしていった。この間の概略史は、『民族植物学ノート』第7号に記録してある。現在も継続している環境学習セミナー（2016年9月で第38回）は、1984年に第1回野外教育セミナーとして始めた。第4回の後、写真に示した第1回野外教育シンポジウム（1986、東京学芸大学）、第2回野外教育シンポジウム（1987、大阪教育大学）、第3回野外教育シンポジウム（1988、愛知教育大学）、第5回、第6回野外教育セミナーを挟んで、第4回野外教育シンポジウム（1989、信州大学）を経て、第5回野外教育シンポジウム・日本環境教育学会創立大会（1990、東京学芸大学）へとつなげていったのである。この間、自然文化誌研究会の会員は事務局を運営するにとどまらず、中込卓男代表理事、宮本透さん、河口徳明さんなどが実践研究の成果発表も行った。

一方で、ポンちゃんの冒険主義的戦術も併進していたのである。非公式事実として記録しておく。当時、ポンちゃんは環境教育学会を創立することに人生をかけていた。色男には金も力もないので、藁をも掴むつもりで支援者を求めていた。たまたまラジオを聞いていたら、青少年団体のD理事長が野外教育に熱心だったので協力を求め、文部省のE初等教育局長に紹介いただいて、環境教育学会を創ることに支援をお願いした。この頃、ポンちゃんは恥ずかしながら、一世一代の大芝居で、赤坂のパブだったかで、D理事長やE局長と酒席を共にして、カラオケで中島みゆきの「悪女」まで歌ってのけたのである。ポンちゃんがジャイアン・レベルの音感の持ち主であることは前に述べたとおりである。

また、農村開発企画委員会の石川英夫専務理事が第1回野外教育セミナーの開催告知（たった2行程度）を新聞で目にとめられ、明峰哲夫さんの都市を耕すが話題であったので、聞きにお越しくださり、その後とても親切に支援して下さることになった。森とむらの会を創るので参加するよ

うに誘っていただき、石川さんのご紹介で高木文雄会長にお引き合わせいただいた。高木先生はポンちゃんの行政学の老師となったのである。彼は大蔵次官の後、国鉄総裁など多くの役職を歴任された。もちろん自然文化誌研究会会長もしてくださった。こんな偉い方とポンちゃんが会議や研究会の後で、石橋隆明事務局長と3人で、奥様には内緒で、親しくビールなど飲んでいただけるとはだれも知らないことであった。高木先生は願いを大方聞いてくださり、先生のかばん持ちということで、多くの省庁次官・長官・局長など高級官僚にご紹介くださった。無口のポンちゃんは短時間の会見で環境教育の重要性を説くために早口・多弁に豹変してしまった。E局長は次官に昇進され、高木先生は彼との対談を設定して、自然文化誌研究会の活動、環境教育の必要性を話し合ってくださった。ところが、E次官は国会議員に立候補するところで、リクルート事件が発覚して、これに関与したとして失脚されてしまった。F元次官からは、学者は王道を行けとお葉書を戴いた。高木先生もその王道通りに、決して政治家にはご紹介をしにくださらなかった。

しかし、この国は〔注：漢字と平仮名は使い分けしている。私は日本くになが好きだが、国にはちょっと抗っている〕、志を実現するためには、もちろん政治家と高級官僚の支援が必要だ。義父がたまたま建材業界団体の会長だったので、婿のために当時のG総理大臣の支援団体理事長に紹介してくれ、ポンちゃんは環境教育の大事さを申し上げた。H理事長は自由民権運動の壮士のような風貌の方で、私が真摯に国事を思っていることだと快くご援助を約束してくださった。G総理は大学（旧制高校）の先輩でもあり、ご当人もご存じないところで、多分I秘書が環境教育の推進に手を貸してくださったのだろう。国土緑化推進機構の研究委員を少ししているので、砂防会館には時々行った。有力政治家の事務所があった本館をいよいよ取り壊して改築するのか。特別会議室の大ガラス壁のレリーフは素晴らしいが、もう見ることはないかもしれない。

このような経緯で、日本環境教育学会は創立に至った。高木先生のおかげで、北山財団の助成もいただいて、準備会事務局の運営もでき、自然文化誌研究会の岩谷美苗初代事務局長、小川泰彦第2代事務局長や小松真木子さんが手伝ってくださった。たくさんの楽しい思い出があるが、また次号にする。このところ固い話題が続き、ごめんなさい。でも、自然文化誌研究会の誇りを忘れないために、3回は続けたい。冒険探検粉塵記はホームページでも読める。書ききれないので、そのうち、ナマステに載せない外伝も書くつもりだ。

追記：小松シズ子（2006）『いつかまた—真木子の波音』文芸社を読みかえしたら、涙が出た。家族が一番大事だ。ポンちゃんも今では、「おとうさん、（ママの）オトーション」だ。





写真. 野外教育シンポジウム、上；正門の案内看板、中；INCHメンバーによる開会の挨拶、下；石川英夫さんの講演。

(ナマステ第 125 号掲載)

第9話 環境教育研究センターの創業のころ

自然文化誌研究会の皆さんの協力を得て、人知れず縁の下の作業員である事務局（企画調整）担当として、日本の環境教育学を創業したのはポンちゃんである。もちろん、世間向けに会長は偉い方々になるものだ。始まりは40年以上も前のことである。しかし、引退して3年ほどたつが、いまだに数多くの環境・教育課題が解決していないばかりか、さらに深刻化しているにもかかわらず、環境・教育を学ぶ意味が深く探求されなかったことに、とても無念を感じている。意味・信念あるいは思想・信条がなければ、人の行動は浮動し続ける。外見流行と内面不易を対比させて、環境・教育関連の教育・研究組織の創業、環境教育推進法の成立の顛末を、個人史的事実として記録しておきたい。

環境教育研究センター（現在の名称）の創業にあたって、第8話で述べた環境教育学会づくりは戦略的な必要性によるもので、第二義的であり、本来、第一の意義は新たな学問、環境教育学の構築であった。農業教育は不要との中央政府の政策により、当時の文部省教育大学室長から附属農場（学則、学内措置）廃止の強い行政指導があった。学内からも、駐車場、サッカー場、第2附属高校、小金井市からは廃棄物処理場にせよとの提案が続いてきた。農業関係の諸先輩にも助力を求めたが、彼らも農業技術や行政に携わる人たちで、農業教育の必要性を認めてくれなかった。いまだに、林業関係者に比べると、農業関係者は一般教育としての農林業に冷淡だ。孤立無援であった。

そこで、農業学習を主要な基礎とする環境教育学の構築へと発想を変えざるを得なかった。農場を守るために、環境教育施設に改組する概算要求を続けた。この過程で、高木文雄先生ほか多くの方々の助力を得て、改組は認められ、附属野外教育実習施設（文部省令）が創立できた。文部省側は「環境教育実習施設」を認めず、名称を「自然教育実習施設」にするように指示してきた。抵抗の結果の妥協点が「野外教育実習施設」の名称である。その後、さらに改組拡充の概算要求を続けて、「環境教育実践施設」になった。この間、他大学では、農場から「〇〇環境教育センター」への改組が続いた。教育学部農学関係の先輩方からは、けしからんと言われていたが、結果的には他大学にも波及して全国で数か所の農場を環境教育センターへの改組の方向で守ったことになり、後に「君は良くやった」とお礼を言ってくださる方も少しはあった。現在では、多くの学生、生徒、教職員、市民が彩色園（農園）を活用してくださり、人知れず満足している。

閑話休題して、もう一つ、「環境教育推進法」のことを記録しておきたい。せっかく、日本環境教育学会も創立し、2000名の会員を迎えたが、ポンちゃんは20000人の会員を獲得して、日本医師会ほどの影響力を持たないと、日本の環境問題を解決に導き、「受験体制」教育の在り方を良い方向に変えられないと考えていた。でも、そのようには発展しなかった。ポンちゃんは学会の運営から外れて、第一義的に重要な環境教育学の核心である「環境学習原論」の構築に専念していた。そこで、第三義的な戦略として、環境教育推進法をアメリカに習い日本でも制定して、環境教育の発展を期すことにした。環境文明21の藤村コノエさんに助力を求め、一緒に国会議員に請願するロビー活動をした。学習会やシンポジウムに多くの国会議員も参加してくださり、超党派で議員立法されることになった。参議院本会議の議決まで傍聴に行き、3名の反対があったが圧倒的多数で法案は成立した。NPOによる提案が議員立法されるのは、民主主義のもっともな道筋だ。

ここに至るまでに、日本環境教育学会の運営委員会に、私はすでに1会員に過ぎなかったにもか

かわらず、呼び出されて、「環境教育は法になじまない。怪しからん考えだ。」などと、お説教を受けた。しかし、成立してしまえば、そのような意見は忘れ去られ、お説教なされたご本人たちも、自分たちの成果のようにふるまい、活用せよとばかりに変節してしまった。ポンちゃんは最初の提案者で、このことは文部科学省や環境省の有力者も知っていたはずだ。したがって、具体的に運用する委員会に呼ばれ、とても忙しくなることを恐れたが、まったくお呼びはなく、提案者の趣旨は黙殺された。第一義、学者として暮らすポンちゃんには、自分の時間を失わずに済んだので、結果良しなのだが、とても不条理を感じた。環境省が閣法として提案できずにいたので、渡りに船と議員立法に乗り移り、換骨奪胎しようとしたのだろう。

この様に、現場で自ら働き、かなりの仕事を成したと自負しているが、現実には黙殺されてしまった。民主主義の時代で、暗殺こそされなかったもので、それでも良しとせねばなるまい。自己の名利を言いつのり、売り込まないので、仕事量の割にはあまりに無名である。それで構わない信条ではあるが、せつかくの成果が正当な評価を得ず、趣旨が普及していないことのみがまことに悔しい。しかし、無名は無力に等しいこの国の先行きが悲しい。

高校生のころ読んだ小説「形」（菊池寛）にあるように、人は形によって惑わされ、他者を品定めする。見た目の服装で人品は判断される。名刺を出せば、所属と肩書でのみ、これまた能力まで判断される。もちろん、確かに経験的に言えば、当たっている部分も多いのだろう。いわゆる就職活動の大学生が黒のリクルート・スーツで身を包み、若者が個性を埋没するのは気味が悪い。若者の個性的な服装を委縮させる会社の面接であってよいのだろうか。社会人になり、形や肩書が必ずしも全人的に的確な評価を与えないことを感じ、人間は中身だと自覚した頃から、ポンちゃんは着心地の良い服装（カジュアル、決してラフではない）をするようになった。

ポンちゃんは前世ではよほど悪人であったのだろうか、現世では、すでに子供の頃から、名利を求めず、人知れずとも社会奉仕をすると決心していた。しかし、この世では、名利を求めて多くの人びとは集まるので、提案者に名利がないと何かを成そうとしても協力は得られず、実現するには至らない。良い考えも行為も広げることにはできない。一方、名利を得て目的が実現に向かい、たとえ達成しても、その過程で名利に溺れて依存したら、墮落する。得られた良い成果は望まない現状維持に取り込まれてしまい、本質が骨抜きになる。この様な文を書いていること自体も、露悪的に言えば、ポンちゃんも裏に名利を求め、隠しもつ二律背反である。

貧乏、非力の色男、ポンちゃんは、確かに高木文雄先生の名声を借りなければ、これらの仕事を成し遂げることはできなかった。官僚や政治家など関係者の与論を作り、市民・世間に向けて世論を醸すのが戦術だった。権力・権威の力がなければ、この国でも実現できないことが多い。現場に出ない人々はきれいごとを言う。こだわりもなく、節操もなく、主張を軽く翻す。現場は泥沼であるが、その中で蓮の花は咲くのだ。実に、環境教育やEcoは世に認められるようになると、次第に名利を求めて悪用され、良識でも正義でもない目的にそぐわない虚偽の部分が拡大してきた。この行為は既成の権力や権威によるばかりでなく、それを非難する対抗側も類似の行為を意識的・無意識的にしている場合がある。考えなしの「正義」は意図した悪意よりも恐ろしいものだ。

環境教育実践施設は、やっと名称変更して、環境教育研究センターになった。国立大学が法人化されたので、名称は文部科学省令による必要がなくなったのだ。20人規模の研究所にしたかったが、大学幹部からは「あんたは頭がおかしい」と一蹴された。家庭や地域社会、この国や地球規模であ

れ、環境のうえで暮らす私たちにとって環境・教育はもっとも基礎的な学習行動だ。不登校が10万人以上、自殺者が3万人前後、高い地位にある人や学歴ある人の犯罪も少なくない。教育関係者の猛省が必要だ。社会を改善するため、本気の「教育学原論」が必要だ。

(ナマステ第126号掲載) (2016.11.24)

第10話 国際的な環境教育活動

放蕩息子であるポンちゃんは、運よく適当な師匠に巡り合っ、植物の世界を人生の遊び場にすることができました。こちらの話はまだまだ尽きることはないのですが、いまま少し世界のためにまじめに働いたこともあったので、自慢しておきたいと思います（オホン）。

タイの王立科学技術教育研究所から環境教育視察団が東京学芸大学においでになり、ご案内したご縁により、ユネスコのアジア事務所から環境教育研修移動助言者として、1994年にバンコックに呼ばれました。ドムアン空港には、黒塗りのベンツでオーストラリア人のマククリーンさんが迎えに来ていたので、要人待遇でパスポート・コントロールはすぐに出られました。彼の奥さまは日本人です。こんなことは初めてのことで、もちろんその後もありませんでした。

同時に、オーストラリアのデビーさんも呼ばれており、元気な彼女が研修の場をとり仕切って欧米調の環境教育プログラムを雄弁に紹介しました。ポンちゃんは、タイ語はもとより、流ちょうなオーストラリア弁で一方的に話すことなどではしなないです。一週間もある場の居心地の悪さをどうしようかと考えました。一つは日本語の教材を英訳すること、しかしタイ語に訳すわけでもないので、これだけではまったく能がありません。そこで、デビーさんの研修内容のなかにない課題を考えました。欧米の科学的な環境学習プログラムにないこと、アジアの環境学習の側から提案できることを整理してみたのです。生活環境を全体として俯瞰する視線がないことに気が付きました。特に、それは食べ物への感謝および自然や精霊への信仰に関する学習プログラムです。欧米にアジアから提案できる全体論的な環境学習の重要な内容だと思います。もちろんたどたどしい英語で、自然文化誌研究会の冒険学校の実践事例と合わせて、提案しました。

滞在中はタイ料理や熱帯の果物を満喫しました。タイの人々はとても親切です。果物が好きだといったので、夜ごとに何かの差し入れがありました。恥ずかしながら、果物の王様ドリアンなどという高価なものは召し上がったことはなかったので、匂いの強い羊羹のようなものを頂いても、これが季節外れのドリアンの姿だとは知りませんでした。ピーマンをどうして食べるのかなと口にしたら、シャリシャリと美味しく、それがフトモモ科のレンブだとは無知なポンちゃんは後で知ったことです。

研修の途中の日程で、急にパタヤに行くと言われ、地元の教員方を集めて研修会でもするのかと推測しました。ところが水着をもってきたらろうとタイの諸先生方はおっしゃる（写真1）。アメリカ軍がベトナム戦争のときに兵士の保養地に使っていたのがパタヤだったそうです。要するに観光旅行をともに楽しもうということだったので。海に入り損ねたポンちゃんを楽しませようと、ティファニー劇場に連れて行ってくださいました。「あなたは何もしゃべるな」と言われ、タイ人料金で入場、デビーさんは隠しようもないオーギーだから外国人料金でした。美しい方々が絵顔満面に踊っていたのですが、一人ラダワン先生だけがユネスコのアドバイザーをこのようなところに連れてきてけしからんというようにお怒りでした。この時、「竹を割った」ような江戸っ子気質に共感して、義姉弟の関係を結びました。ラダワン姉はタイで最初に環境教育センターを創立し、私は日本で最初に創立していたのです。別の先生はアドバイザーをトゥクトゥク（三輪タクシー）に乗せるなんて失礼と言いながら、クロコダイル・ファームに連れて行ってくださいました。何百というワニ、爬虫類の眼の睨みと巨大な口は恐怖だったな。

このご縁から、ラジャバト大学プラナコンの大学院で講義をもつことになり、その後、タイ・日本TJ自然クラブを創り、20年来のお付き合いが続いています。さらに、国際シンポジウムを森とむらの会のご援助で企画して、今はなき麻布グリーン会館で開催し、ラダワン姉らタイの方々、ジョアン・ウェブ先生らをお呼びしました（写真2）。この成果を見て、東京学芸大学の西澤事務局長がご助力くださり、さらに大きな国際シンポジウムをオリンピックセンターで開催し、欧米やアジア各国から10人ほどをご招待することになり、500人以上の参加希望がありました。これらの実績で、文部科学省のお覚えめでたく、ついにユネスコアジア太平洋環境教育セミナーを毎年開催することにつながりました。毎年、10カ国ほどから参加者が来訪していただきましたので、この伝でいくつかの国に行き、お世話になりました。また、文部科学省の国際連携タスクフォースにもタイとの交流事例を取り上げていただきました。

輪はさらに広がり、国連大学の坂本憲一先生のお誘いで、国連大学ゼロエミッション活動に参加させていただき、共同研究もあってか、当時のヒンケル国連大学長に公的にご紹介いただきました。他方、京都大学の河野昭一先生からご推薦いただき、セントルイスで開催された国際植物学会のシンポジウムで招待講演をしました。ちょうど、マクグワイア選手が500本を超えるホームランを打った球場の近くに国際会議場があったので、その瞬間、祝福の花火も見えました。ついミーハーでカルディナルスのTシャツを土産に買ってしまい、ステッカーも得意になって車に貼っていました。このように、国際会議の場でELF環境学習過程を提案して、批評を受けながら、発展させてきたのです。なんとか、つたない英語で世界を渡ってきました。

もう一方で、文部省の若いお役人様から、始まったばかりのワールド・スクールの手伝いをしてあげたらと勧められて、高野孝子さんに出会いました。ワールド・スクールというのは、高野さんを含む国際隊が犬ぞりで北極圏を旅行する様子を、パソコン通信で世界の子供たちと共有する試みでした。エコプラスとのおつきあいはこの時からです。グレゴリー・マイケルさんの日本縦断旅行の企画にも協力しました。今、小菅村で栽培している団子麦は、彼が瀬戸内海の大三島の農家から頂いてきた種子をつないでいるものです。環境協会の依頼で、デンマークとドイツの環境教育の調査に行き、ワールド・スクールの運営委員であったデンマークのインガ・リーズの家に泊めていただきました（写真3）。林野庁の調査依頼で、カリフォルニアの野外環境教育事情の調査に行き、ジョセフ・コーネルさんのお世話にもなりました。

この冒険教育実践ワールド・スクールは、当時アメリカの副大統領であったアル・ゴア氏に高く評価され、まだ始まったばかりのインターネットを用いた環境学習プロジェクトGLOBE（地球のための環境学習観測プログラム）につながりました。NOAA（アメリカ海洋大気庁）やNASA（アメリカ航空宇宙局）との協力によるGLOBE日本の中央センターを文部科学省の委託で東京学芸大学が受け、今日まで継続しています。これの日本拡張プログラムがEILNET（環境学習ネットワーク）で、とても良い活動でしたが、たった2期4年の事業でした。インドのシタラム先生（国際雑穀フォーラム会長）のお嬢さんラシュミも参加して下さり、カレー談義をしたのは楽しかったです。ちなみにこれらの実践報告は隔年発行されています。

これ等のお客様をご案内する際には、自然文化誌研究会のメンバーがいつも一緒にお付き合いをしてくれ、ほんとに助かりました。これらの自然文化誌研究会が支えたパイオニア活動の、ポンちゃんだけが知る事実を書いておきたかったのです。この国では最初に創業・起業した人々、独創的

なパイオニアたちは評価されず、黙殺されてしまうことが多いです。鎖国以来、とりわけ明治維新の脱亜入欧政策以来、模倣し商品化することこそが「新しい流行」だともてはやされているのです。閑話休題、次回からは、また、ちょっと作り話っぽい冒険探検旅行の話に戻ります。(2017. 2. 24)



写真：左から右に、1 国際シンポジウム参加者（日本）、2 パタヤの海岸（タイ）、3 環境学校の移動実験バス（デンマーク）。

（ナマステ第 127 号掲載）（2017. 3.）

第11話 雑穀街道をFAO世界農業遺産に～ポンチャン最後の冒険

なぜか、コリアの鉄道駅の待合室にいた。観光旅行会社のツアーに参加していたようだ。この終着駅でいよいよ旅の終わりになり、国際空港駅までの列車に乗ることになったようだ。ところが、みな切符を持っているのに、ポンチャンだけ切符がなく、自分で買えと朝鮮語で言われているようだ。財布にウォンはほとんどなく、高額貨幣と引き換えられるような書類があるだけだ。もたもたしているうちに、もう切符は売り切れたので、お前は列車に乗れないぞ、と言われた。ここで、二度寝の目が覚めた。

このところ、ポンチャンも、もういい歳の大人になったので、冒険活動はそろそろ若者たちに引き継いだつもりだ。気楽な観光旅行をすることにして、観光旅行会社のツアーに参加している。添乗員さんの後をついているだけなので、緊張感もなく、緊急な状況への危機対応をしなくなった。だから、わけもわからず、こんな怖ろしい夢を見たのだろうか。夢見が悪いのは、いまだに冒険心が消えやらずにくすぶり続けているからだろう。そこで、『ファイマンさん最後の冒険』に習って、ポンチャン最後の冒険は「雑穀街道」をFAO世界農業遺産にすることに決めた。人生はいまわの際まで挑戦と冒険だ。多様な雑穀も、冒険探検も「絶滅危惧種」にしてはいけないよ。

FAO世界農業遺産とは、伝統的な農業と、農業によって生まれ、維持されてきた、土地利用（農地やため池・水利施設などの灌漑）、技術、文化風習、風景、そしてそれを取り巻く生物多様性の保全を目的に、世界的に重要で、持続可能な農業の実践地域をFAO（国連食糧農業機関）が認定するものである。FAOも大いに反省したのか、大規模農業の称揚のみから、小規模家族農耕の重要性を強調するようになった。日本ではほとんど無視されてしまったが、2014年は国際家族農業年であったようだ。FAO世界農業遺産は、第一に、先祖の生業の歴史、暮らしの基層にある伝統的知識や技能を受け継ぐ責任と誇りである。観光客が増えるとか、助成金がもらいやすくなるとか、これらお零れは二の次のことである。学術的な内容保証が求められてもいるが、現実には行政主導でその担保がなくてはならない。

自然文化誌研究会が山梨県上野原町西原での、「雑穀のむら～雑穀の栽培と調理」の調査研究（1974）から始まったことはすでに書いた。これらの成果に基づいて、雑穀を栽培する生物文化多様性が日本でもっとも豊かに保たれてきた地域、多摩川水系の丹波山村、小菅村から相模川水系の上野原市、相模原市緑区までをつなぐ道を、雑穀街道と勝手に呼ぶことにした。この雑穀街道に沿って、今も雑穀など作物在来品種を多様に栽培している山里が多くある。山女魚養殖を初めて成功させた小菅村橋立、穀菜食による健康長寿で世界に知られた上野原市桐原、トランジション・タウンで知られた相模原市藤野などが続き、FAO世界農業遺産に認定を受けるにはふさわしい地域と言える。

環境は現在目に見える空間だけで構成されているのではなく、過去から未来へと続く時間と空間から構成されているのだ。目に見えずとも、歴史事実と未来想像は現在環境の枠組みを構成している重要な要素だ。サバンナ農耕文化の雑穀や根菜農耕文化のイモ、これに新大陸農耕文化を含めて、トウモロコシ、マメや野菜類も、ほとんどが世界各地から海を渡って日本列島に伝来した栽培植物だ。絶滅危惧の雑穀在来種を継承、普及する活動をしてきたが、麦類にしても多くが輸入され、あまり栽培されなくなってしまった。初夏に黄金色に熟す麦類は冬雨・夏乾燥の地中海農耕文化の主要な穀物で、日本に伝播しても冬生一年草の性質は変わらないので、麦秋は梅雨入り頃の季語だ。

しかし、現在、麦類の栽培は減少し、このために死語寸前の麦秋を伝統的な知識や技能により再現することにした。栽培植物の在来品種種子を保全するためには、栽培・加工・調理・食作法を共に継承せねばならない。また、伝統を継承するためには新たな手法も加えて、再創作が必要でもある。

佐藤雅彦さんが、学大探検部 40 周年記念セミナーの時に、これらの活動は「報われることのない仕事、評価もされないし、もちろん見返りはない」とおっしゃっていた。自然文化誌研究会（学大探検部）の任意活動はもとより名利を求めてはいないので、世間が名利で動いているからには評価や見返りが無いのはあたりまえだ。

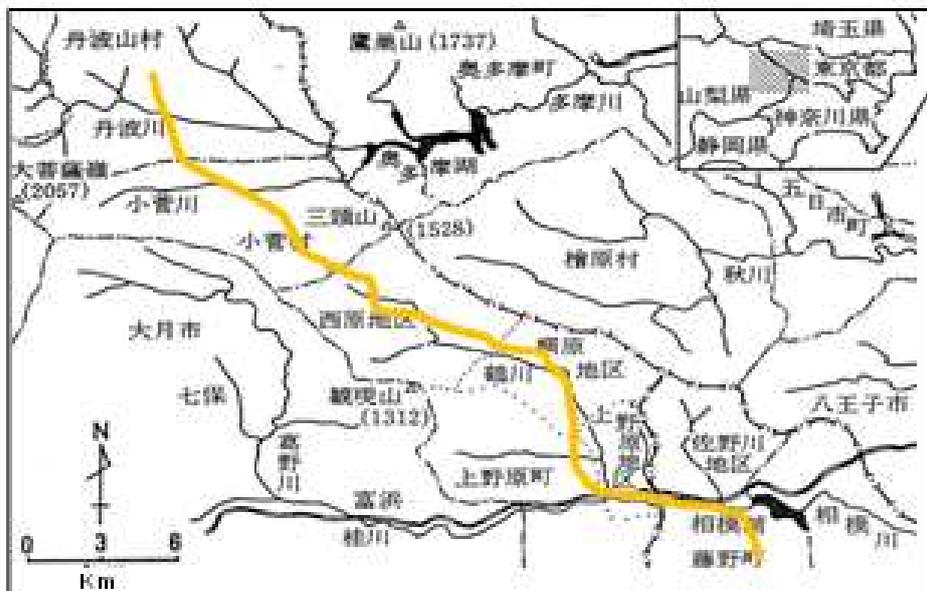
さて、志しかない冒険探検者が、何の見返りも提供できないのに、名利の権化である行政府から賛同をどのようにとりつけるか、これは容易なことではない。したがって、雑穀街道を FAO 世界農業遺産にすることは、自然や農山村がフィールドであるだけではなく、都市の人々、とりわけ地域（山梨県、神奈川県、上野原市、相模原市、小菅村、丹波山村）から中央（農林水産省）および国際（FAO 国連食糧農業機関）の行政府に納得を頂くために、かなり複雑で、険しい困難を伴う冒険探検ということになる。さらに、この冒険探検は今までの学術調査や冒険学校と違って、あまり経験したことのない方法で、時空間を超えて何千・何万人の賛同者とともに活動することになる。どうぞ、皆様も賛同してくださり、一緒に冒険してくださいね。詳細は下記の「雑穀街道ホームページ」で、お知らせしていきます。

<http://www.milletimplic.net/milletsworld/millstr.html>

* 学大探検部（愛称）は本来の正式名称を「東京学芸大学自然文化誌研究会冒険探検部」といった。自然文化誌研究会と冒険探検部が合同したからである。現在は、NPO 法人自然文化誌研究会、東京学芸大学冒険探検部および同 OB 会、東京学芸大学ちえのわなどの関連団体が連携しながら活動している。

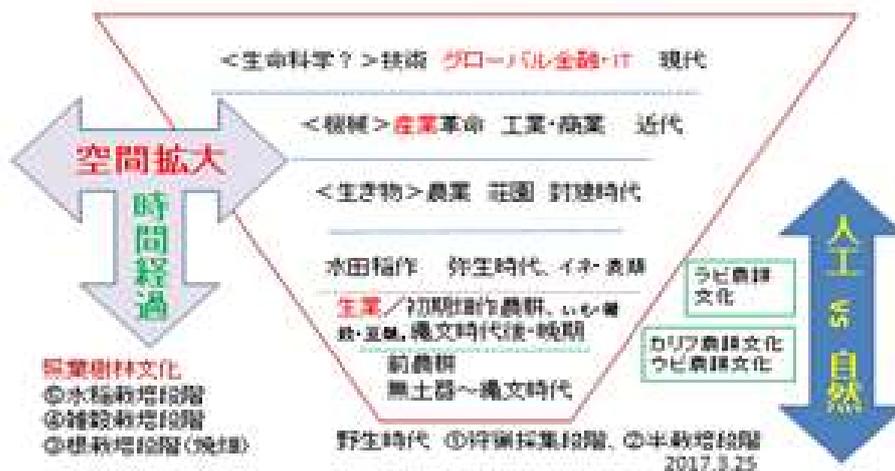
2017-5-20

雑穀街道をFAO世界農業遺産に



現在日本の農耕文化の歴史的多層構造

連続的に、混合的な生物文化多様性への蓄積と衰退
 複雑 / 単純、虚無・便利の超克 (The nothing / The convenience)



余話その1

ナマステは子供や保護者も読者なので、遠慮して書かなければなりません。ナマステに掲載できない

ような大人の話を書きます。